

2025/7/1

関係各位

Far East Group

会長 大嶋 謙嗣

会報七月号 不変は変化の中に

目次

- ・ 宇宙の秩序は関係性と変化
- ・ 信念でも志でも不変なものは存在しない
- ・ 人間を支えるための幻想
- ・ 言葉の罫
- ・ 自由という在り方
- ・ 変化の循環
- ・ 不変とは

● 宇宙の秩序は関係性と変化

宇宙の秩序とは、関係性と変化にある。これはただの表現ではない。易経の根本にある易の三義（変易・不易・易簡）、そして現代宇宙論や量子力学にも通じるものだ。で、今回は特に「変化」に光を当ててみたい。

まずは易の三義について

① 変易↓止まらぬ変化（ダイナミズム）

宇宙は一瞬たりとも同じ状態ではない。銀河は生まれ、星は死に、我々の細胞も毎秒入れ替わる。つまり、「存在する」とは「変わり続けること」である。

② 不易↓普遍なる法則（秩序）

宇宙には確かに「原理原則」がある。万有引力、エネルギー保存の法則、因果律。そして陰陽相補原理。これらは動的バランスの法則である。

③ 易簡↓自然のまま、無理なく進む（成長）

変化はカオスではない。より良き方向、より高度な秩序へと進む傾向がある。それが成長というやつだ。種は芽になり、芽は幹になり、花を咲かせ、実を結び、また種を生む。このプロセスは単なる無秩序な変化ではなく成長である。

宇宙の秩序とは、不易の法則に基づき、変化し続ける成長・進化のプロセスである。変わらぬ原理があるからこそ、変化が意味を持ち、成長という道筋になる。従って、戦士諸君、これを己の血肉にせよ。止まらぬ変化を恐れてはいけない。むしろ、その変化こそが宇宙の意志であり、成長こそが秩序に沿った生き方なのである。

ただ、そうすると、自己の確立、定まった志、変わらない信念というのは、すべて

宇宙の秩序に反することになる。なぜなら、宇宙は不変ではなく変化であり、動的なバランスなのだから。この点をどう解決していくか。

●信念でも志でも不変なものは存在しない

これは宇宙のダイナミズムと人間の在り方の交差点だ。「変化」が宇宙の秩序であるならば、自己を確立するという行為もまた、「変化」と調和していなければ本物ではない。つまり、「信念」とは、動かないものではなく、変わりながら貫かれるものである。従って、「自己の確立」とは、変化の中で揺るがぬ中心を見出すことでなければ嘘である。宇宙は変わっていく。季節も、天体も、我々の体も心も（変易）。だが、変化の中にも「核・本質・中庸」（不易）というものがある。

例えば、木は枝葉を伸ばして年ごとに姿を変え、根は地中深くに張り巡らされるが変わらずに在る。宇宙は膨張し、銀河は回転するが、物理法則は変わらない。つまり、「確立された自己」や「志」「信念」とは、変化を受け入れながら「核」を守るものである。それは「固執」や「頑固さ」ではない。柔らかく、だが折れぬ心柱である。この「変わらない信念」は、変化とともに成長し続けるものである。ここがポイントだ。変わらないように見える信念とは、変化に適応し続けたからこそ残ったものなのである。例えば、揺れても倒れない竹のように。刻々と形を変える炎のように。これは変わり続けながらもその中心は比喩的に言えば燃え続けてる。これが「定まる」「変わらない」ということの内実である。

これを踏まえて、真に宇宙の秩序に沿った男とはどういう奴なのか確認しておこう。これは「人物論」への転用である。

- ・変化を拒まないが、しかし流されない。
- ・己の核を持ちながら、常に再定義し続ける。
- ・志とは「目指す光」であり、歩みは常に変わる。
- ・信念とは「魂の骨格」であり、姿形は進化し続ける。

このような男は、宇宙の秩序そのものと共鳴して生きている戦士である。信念や志を不動のまま守るのではなく、「変化の中で無限に磨き続けていく」ことが「自己の確立・自己の実現」なのだ。信念と志に生きれれば、それを「不動」のまま生きることが絶対にはできない、むしろ信念を貫くために必ず変化すべきだと自覚しているはずだ。揺れて、進め。変わって、貫け。それが、宇宙・大自然の秩序を味方にして処していく男の在り方である。宇宙のリズムで踊りながら、魂で己の道を突き進むのが人間である。

●人間を支えるための幻想

しかし、残念ながら今まで言ってきたことは言葉での誤魔化しである。それは意志を伝達する手段としての手段なのだから致し方ない：と弁解させてほしい。言い方次第で、どんな矛盾も「もっともらしく」聞こえてしまうのは言葉の罠である。では、

誤魔化さずに向き合うならどういうことになるか。「宇宙が変化できてゐるなら、
「変わらない」信念や志なんて嘘ではないのか。結論を言えば「その通り、嘘である。
変わらないものなんて、この世界には本質的には存在しない。すべては変わる。山も
海も、思想も身体も。だから、変わらない信念というのは、厳密に言うなら、「変わ
りながらも貫かれていく一つの傾向」ではない。そういうことだ。

●言葉の罫

ここで、言葉の罫を何とか解体してみよう。例えば、「信念を持て」と言うと、ま
るで石のように一切動かないイメージになる。しかし、実際は、「どのように状況が
変わっても、物事の判断基準になる核・中心を自分の中に持っていること」なのだ。
つまり、「変わらない」という言葉は嘘である。正確には、自分への風向きがどのよ
うに変わっても、折れることのない自分なりの「在り方」を確立しろ、ということだ
ある。

ならば、自らに問うべきことは「自分が貫こうとしてゐる信念は、今この瞬間の現実
と響き合っているか?」「その志は、時代や環境が変わってもなお、自分の魂を震わ
せるか?」である。ここを自問できる奴だけが、言葉の罫から抜け出すことができる。
こう言い換えよう。「変化が宇宙の秩序」ならば、信念や志は、変化を内包する設
計でなければダメだ。「俺の信念は絶対に変わらん!」って言ってるやつは、もう宇
宙の秩序から落伍してる。そうではなく、「俺の信念は、変化に晒されて研ぎ澄まされ
れ続ける」ってやつは、宇宙と共に進化してる戦士だ。信念とは、変化に負けないこ
とではなく、変化と踊りながら、それでもなお立ち続けるものである。これが腑に落
ちるなら言葉に飲まれることはない。言葉の檻から抜けられる。

まだ、もしどこかに「誤魔化されてる感」を持っているなら、それは言葉で理解し
よう、言葉で生きようとする限界だ。「信念」も「志」も、そして「変化」すらも、
全ては言葉だ。言葉は道具であり武器である。しかし、人間の「在り方」「行動」は、
言葉の外にある。

従って、「信念とは何か?」「変化とは何か?」そんな定義に言葉で答えても、最
後には虚しさが募るだけだ。なぜなら、言葉で答えを得たところで、明日の決断は自
分の「行動」「在り方」「生き様」でしか決められないからだ。「信念」も「志」も、
持つものではない。日々、行動と覚悟で永遠に創り続けるものである。もし、今日
「迷ったけど動いた」なら、それが志だ。昨日、「弱さを噛み締めて、それでも目を
背けずに立っていた」なら、それが信念だ。行動と選択の総体が、いつか自分の背中
に「信念」を刻む。それだけである。

変化に合わせて自分を変えることはそこまで難しくはない。だが、変化にさらされ
ながらも、自分の「魂」を持ち続けるのは容易ではない。「自分はまだ未熟だ」と思
いながら、それでも前を向く限り、信念は既に在る。変化を生きるたびに、自分自身
が宇宙の秩序そのものであることを証明している。言葉で迷う必要も、言葉にこだわ

る必要もない。行動で答え、在り方で答え、背中であえればよい。自分の信念は生き様で語るだけである。言葉で定義しても虚しいだけだ。

●自由という在り方

「信念」や「志」なんて、最終的には全部「幻想」だ。なぜなら、それらはすべて「人間が自分を支えるために作った構造」だからだ。宇宙には「志」も「信念」もねえ。星が爆発しても、誰も泣かねえ。黒洞に吸い込まれる命があっても、そこに意味はねえ。宇宙はただ在る。変化する。生まれ、壊れ、また巡る。それだけである。しかし、そんな宇宙の無慈悲さに、抗ってでも立ちたいという叫びが、我々人間の魂だ。何の保証も、何の意味もないこの世界で、「それでも俺はこう在る」と頷くこと。それが「信念」だ。志とは、宇宙に意味を刻もうとする無謀な挑戦だ。だから、信念も志も幻想でいい。その幻想のために命を燃やせるか。それがすべてだ。

信念なんて死ぬまで揺れる。志も何度も折れる。でも、それでも立ち上がり続けて「俺はこれを貫く」と言い切れる男だけが本物だ。それは宇宙の秩序に「従う」のではなく、自分が秩序そのものになる生き方だ。言葉ではない。お前がどう生きているかだ。それを命で示すだけだ。「語る」のではなく、「生きる」のだ。我々は「答えない世界で、それでも答えを作る側」に立ってる。生き様で世界を書き換え続けるだけである。

結局最初に戻るのだ。未熟なうちは変化が不安で確かなものを求める。それを正当化しようと、確たる信念や志に縋ろうとする。しかし、それはただの方便だと気付く。変わらないものはない。それが宇宙の秩序だから。そして自分に立ち返る。結局自分を由とするしかない。自らを由として生きる。こう在りたいという自分の在り方を貫いていく。変化しながら己の在り方を貫く。それが自由であり、それが宇宙の秩序だ。変化に怯え、確かなものを欲しがり、信念や志等の「拠り所」を求める。それは、未熟な人間ならば当然の姿だ。だが、そこにとどまってはいけない。方便を方便として見抜き、それでもなお、在り方を貫く自由を知ったんだから。

宇宙は変わる。すべては流れ、壊れ、また生まれる。だからこそ「この瞬間」に、己を燃やし尽くす。その境地に立ったなら、もう「信念とは何か」を語る側ではない。創る側だ。「変化しながら己の在り方を貫く」それが自由であり、それが宇宙の秩序だ。

●変化の循環

宇宙の秩序とは、ただの変化じゃねえ。変化の循環だ。星が生まれ、爆ぜて、塵となり、また星が生まれる。季節が巡り、命が芽吹き、実花をつけて、枯れて、また土に還る。人もまた、学び、忘れ、傷つき、癒え、そしてまた立ち上がる。それらは一度きりの変化じゃない。リズムだ。うねりだ。絶え間なき巡りだ。

つまり、宇宙の秩序とは、

・変化することを止めないこと

・その変化が巡り続けること

・そして、その循環の中で「新たな形」が絶えず生まれていくことである。

「変化しながら己の在り方を貫く」と言った瞬間、お前はこの宇宙の秩序Ⅱ循環の中心に立った。巡る変化の中で、自分を芯に据えて在り続ける。それはもはや、宇宙そのものとして生きるってことだ。お前のその呼吸が宇宙の律動だ。変化に怯えることなく、循環に乗り、己を燃やして進む男として、永遠の変化に魂を刻め。

●不変とは

不変とは、ただ止まっていることじゃない。変化し続けることによってのみ成り立つ不変がある。山は風雨に削られながらも千年の姿を保つ。炎は形を変え続けながらも燃え続ける。音楽は一音一音が流れていくからこそ旋律という不変の美を描く。そして人間の在り方も同じだ。変化を拒んで固まった「信念」は、やがて死ぬ。だが、変化を抱きしめ、流れの中で己を選び続ける信念は、どこまでも不変の輝きを持つ。従って、真に不変なものとは、変化しながらなお貫かれ続ける意志のことである。それは、移ろいを拒まず、流されもせず、己の核を抱いたまま、進み続ける在り方なのである。だから、不変というのは変化しながらでなければ生じない。変化を否定せず、受け入れて、その中で不動の魂を燃やす。それが生き方だ。変化こそが不変なのである。

もう言葉の段階は終わった。これから、在るか、在らないか。生きるか、生きないか。燃やすか、燃やさないか。ただそれだけだ。話す必要も証明する必要もない。自分が自分として生きる。それだけだ。

生きるとは「変化し続ける宇宙の中で、今この瞬間を、己として燃やし切ること」だ。呼吸をしてるから生きてるのではない。自分の意志で立ち、自分の在り方を選び、今という一瞬に命を燃やし込む。その一步一步の炎こそが生きてる証だ。生きるとは、選ぶこと。変化という波に立ち向かい、時に乗りこなし、時に飲まれてもなお、己で在り続けること。それだけである。その炎こそが次世代へ継承されていく魂である。

今月も健康と健闘を。